

若き日と文学と

北
杜
夫

辻
邦
生
対
談

北杜夫・辻邦生対談
若き日と文学と

中央公論社

北杜夫・辻邦生対談 ―― 若き日と文学と 定価 390 円

昭和45年7月10日初版印刷 昭和45年7月20日初版発行 © 1970年 検印廃止

著者 北 杜夫・辻 邦生 発行者 山越 豊 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目一番地 振替 東京34

まえがき

北 杜夫

昨年の夏、たまたま辻邦生と私は、フランスからオーストリアのほうへ汽車旅行をした。短期間ではあったが、久方ぶりに充実した旅を味わえた気がした。

辻と私とは、旧制高校からの友人である。友人というより、彼は初めから私にとって文学の先輩であった。

この旅の途中、汽車の食堂で、国籍はカナダ、父親がベルギー人、母親がオーストリア人、奥さんがデンマーク人、という中年の紳士と同席した。彼は、人生なかならず女性に絶望し、できれば職をやめて隠退して、似たような趣味、というより自分と人生観を同じくする人間だけを集めたクラブでもつくり、ごく限られた人間とだけ付き合つて余生を送りたい、という意を述べた。洗練された感覚の持主のようで、ユーモアも十分に解し、その底にかなりの人生体験から生まれた確固とした厭世観を漂わした男であった。

そういうごく一刻の、妙に記憶に残る人間との会話もあったが、この旅行中、辻と私は久方ぶりの再会のせいもあって、ずいぶんと二人きりで話しづめに話しつづけて過した。

前述の紳士のような興味ぶかい人間との出会いは実際には稀であるから、私たちは汽車に乗ると、他人に邪魔されぬよう、コンパートメントの座席にわざと満員のようにはランクを投げ出しておき、なおかつ、はいつてきそうな人間が来ると、私が奇声を上げたりする。すると、乗客らは怪しげな東洋人を敬遠して、他の部屋へ行ってしまうのであった。

こうして二人だけの水人らずの状態で私たちは、尽きぬとりとめない会話を交したが、なにかの拍子に、兩人で生涯にぜひとも共著を出そうという話も出た。外国ではゴンクール兄弟をはじめ、共著の例がかなりあるが、日本にはない。辻は純文学作家だが、スパイ小説の腹案があるという。その卓抜な筋書に、私流のドタバタナンセンスを加えたら、エンターテインメントとしておもしろいものができるのではないか、という夢物語であつた。

しかしこの実現は、今のところ困難である。

それでも、そのときの夢想は、二人の頭の片隅に残っていたらしく、その年の秋に帰国した辻が、二人の好きなトーマス・マンの没後二十年を記念して、対談をやらぬか、と言ってきた。

私はこれまで、いわゆるしかつめらしい「文学対談」というものをやったことがない。しかし、たまたま躁期であつたためと、対象が崇拜するマンのことであつたことから、柄にもなく承知をした。承知したどころか、その夜、私は頭にねじり鉢巻をして、文学の先輩である辻の言葉に無理矢理に難クセをつけようとまでした。これが、昭和四十五年一月号の『展望』に載った「トーマス・マンを語る」である。

私たちの腹案としては、そのあとマン作品の少し精密な各論をやって、二人なりのもうちょっとまとまった「マン対談」を本にするつもりであった。

ところがその後、たちまち私は鬱状態となり、まともな話はとてもできそうになかった。そのおり、出版社から、若い人向けにもっと現実的な一般的な対談を加えて本にしたいと言われたとき、そのほうがずっと楽であるがゆえに、私はつい承諾をし、二日にわたって、辻と長い無駄話をした。無駄話といっても、辻の理論的な頭脳は、私の出たとこ勝負の、半分酔っぱらった出鱈目な会話を、見事に補足し、若い読者をかなり導くに足るものとなっていると思う。

あからさまに言うなれば、この対談集は、ときに真剣な重要な話から、軽い冗談までを含み、しかも遠慮のない古い友人同士の間柄から、ごくざつくばらんのものとなった。

ときには難解めいた話もあるが、辻邦生と私との極端な資質の差異から、かえって一つの気楽に読める漫才ともなっているのではなからうか。愚かな私は、漫才師の脇役として、相手にピシャリと扇子でぶたれる役を引き受けたわけで、しかもそれを適役としてみじみ思うのだ。

ともあれ、ゲラ刷りを読み直し、私がいかに酔っぱらって醜態を演じているのを恥かしいと思うとともに、ともかく先輩でありすぐれた作家である辻との二人の本ができあがることに、私は身にあまる光栄と嬉しさを感じる。

目次

まえがき——北 杜夫 1

若き日を回想しながら

・
・
・
・
・
9

信州の幻影と幻滅 9

精神的思春期と文学 30

トーマス・マンを語る

・
・
・
・
・
55

マンの墓に詣でて 55

マンの翻訳をめぐる 62

黒い目・青い目 69

フモールとイロニー 97

いささか人生論風に

・
・
・
・
・
121

生と死の淵から 121

昼と夜の世界に生きる 136

時代のなかの人間ということ

149

無限のなかの生命体 173

あとがき——辻 邦生 197

若き日と文学と

若き日を回想しながら

信州の幻影と幻滅

辻 君と初めて会ったのは、昭和二十年の五月ぐらいだったかな？

北 終戦の年の六月だ。

辻 君は日にちまで憶えているはずだね。ぼくは忘れちゃった。

北 これだけは、生命^{いのち}からがらだったから、奇蹟的に憶えてる。ぼくの家が焼けたのが五月二十五日で、行くところがなくなっちゃって、六月何日かに松本高校の思誠寮に転がりこんだんだ。

辻 君が来るまえに、すでに、斎藤茂吉の息子が来るという話は伝わっていた。

北 それは、くだらん話だ。なんというくだらぬ寮なんだ。

辻 とにかくそういうふうにして思い出していかないと、思い出せないんだよ。

北 辻と出会えたのは、あれは偶然でしょ。おたがいに松高の生徒だったにしろ、ああいう戦局のさなかでは、辻が寮にいたこと自体、特殊事情だった。

辻 つまり、ぼくが落っこったから。

北 幸いにも落第してくれたから、寮にいたわけでしょ。そうじゃなければ、勤労動員に行っていたはずだから。それからぼくも、自分の家も動員先の工場も焼けてしまったために早く……。ほんとはね、正式入寮じゃなくて、証明書偽造して寮に入ったんだ。

でもまあ、だからこそ、そばにいて話す機会もあったわけね。

辻 終戦直前の八月に、大町市の工場に動員されても、そこに君が来て……。

北 あ、この世にはこんな人間いる、なんて、おれ、たまげていたんだ。尊敬してな。

見方によっては、〈人生の因縁〉とよく言われるものは、あとのこじつけだ。しかし、なにやら〈因縁〉とか〈星のめぐり合わせ〉という言葉を使いたくなることも、やはりあるかも知れないね。辻 それはあるね。

北 ふつうだったら、高校出ちゃえば、生きる世界が違うから、離れてしまうけれども、おたがいに文学なんか好きであったために、文通もつづいていた。それから、辻がフランスに留学して、またふつうだったら、おたがいに切れてしまうはずなのが、なんの拍子か、ぼくがマグロ調査船ひょうしなかに乗り込んで……、したらバリーで出会って、旧交を温める。三度目はこのまえ、ぼくがアポロ発射を見に行った年、ヨーロッパでね。

あのときはほんとはもう、疲れていてね。ケープケネディも、ヒューストンも、ものすごく暑いんだ。だからヨーロッパ回る気力なんか、初めはなかった。おれはもう齡としとって、ロンドンなんて

いう地球の彼方まで行けるはずがない、なんて考えてさ。でも大都会というのは、面白いでしょう。ぼく、ニューヨークでつくづくそう感じたね。初めは、あんなところ、ああくだらん、なんて思っていたら、あんな面白いところないんだ。

それでまあ、ロンドンもひと目見ておこう、なんていう気を起こして、ヨーロッパへ行ったら、またそこに、たまたま辻が二度目の留学でいた。それで、いっしょに汽車旅行なんかもしたわけだけど、これも、因縁と言えば因縁か。

辻 そうね。そういう因縁と言うか関係は、文学史なんかにも意外に多いね。たとえばヘーゲルとシェリングとヘルダーリンは、テュービンゲンの同じ神学校で親友だった。それからヴァレリーとジイドも、その間にピエル・ルウイスを介して知り合っていた。つまり、ピエル・ルウイスとジイドがパリのリセ（官立中学・高等学校）で友だちで、そのルウイスがモンペリエでヴァレリーと友だちになり、その紹介でジイドとヴァレリーが友だちになる。それで、おたがい才能を尊敬していた。ヴァレリーが二十年間沈黙していて、その後いきなり詩を書いても、すぐ発表できたというのは、親友ジイドがいたからだね。

北 いきなりそういう西洋の偉人の名前を持ち出されると、ギョッとするけれど、日本の例だって、いくらもあるでしょう。小林秀雄さんのまわりの人たち、——大岡昇平さんにしろ、かなり齡とってから小説書きました。あの仲間、友人たちは、みんな立派な仕事をしたでしょう。

若いころは、文壇に出るにも、先に文壇に出ているのと友だち付き合っていると、そういう人

のヒキとかツテとかで、少しは得かな、なんて思っていたが、しかしいいものを書く人は、時間の差はあっても、結局、出てくる。だから、偶然、学校友だち、というのもあるけれども、同じ学校にだって、いろいろなやつが、雲のようにいるわけで、そのなかでおたがい友だちになるっていうのは、やはりなにか人間どうしが……。

辻 惹き合うんだね。

北 こいつは、と認めたやつと友だちになるということが、むしろ本質だと思うな。

辻 それはそうだ。ただ、そのへ惹き合うということのなかには、何かそれぞれのもっているものを認め合うということが、まず先にあるわけでしょう。気質と言うか……。

北 キャラクターの意味？

辻 あるいは、才能と言ってもいいが、要するに、そのときはまだ実現していないけれども十年後か二十年後かに結実するような、萌芽状態の才能といったようなものがあって、そういうものが、ふしぎな感覚で惹き合うということが、まずあるんじゃないか。

北 まあともかく、ぼくらは戦争に負ける直前に知り合った。ただ、ぼくはね、あのころは落第生と病人とがごく少数、寮に残っていたわけだけど、そこへとびこんで、急にオトナの世界に来たと思っただけ。

つまり、ぼくが初めて寮にたどり着いて、白線巻いた高校生が来たから、パッと挙手の礼をした。

だって戦争中は、中学生は、先生に対してでも誰に対しても、挙手の礼をしあうように訓練されていたでしょ。それを、ふしぎとも思わなかった。もう慣れていたわけだ。したら、その汚ねえ高校生、——おれの先輩がだ、へえっと、なにかたじたじというような感じで、それからニヤリと笑ったんだ。つまり、そんなすごい敬礼など、しなくていい世界だったんだね、高校の寮というところは。まだ戦争に負けるまえなのに。その時は、なんてだらしねえ野郎だと反射的に思ったけれど、あとで、感激もしたね。あのころはまだ、これが自由世界だなんていうふうには思っていなかったけれども、少くとも、敬礼を受けてニヤリと笑うなんていうのは、さすが高校生だ、オトナだと思つたよ。そのなかでも君は、最も自由精神を抱いていたらしいけれど、まわりは実際どうでした？

辻 当時、寮生は、できるだけ意識的に自由でありたかつたし、自由になろうとしていたと思う。たとえば、特攻隊が沖繩で初めて、一機命中という発表があつたとき、いかに戦争であつても、そういうふうな絶対につながる見込みのないかたちで人間を戦術に使うというのは、——人格をもととした人間がそういう道具になるということは、許されないって、ぼくはぶちまくつた記憶がある。それぐらいのかたちの戦争批判でしかなかったけれど。

北 ぶちまくつて、反応はどうでした？

辻 それは……。だって、みんな、それに賛成するような人しか落つこちなかったもの。

北 (笑い) それ、たしかだな。けれど、そういうところに、ぼくみたいのも現われたわけだ。うぶ

で、かたくなな大愛国者がね。

君は立派に生きのびようとしていたけれども、ぼくは、玉碎するつもりで、死にたくてうずうずしていた。本土上陸が始まったら、おれ、ほんとに蛸壺に爆裂弾抱いて入るつもりでいたんだよ。ただ、教練下手だったろ。それに、敵と刺し交えに死ぬという衝動的精神には溢れていたんだけれども、反面おっかないんだ、軍隊が。

だから、前の商業高校に駐屯していた将校が、寮生が変な寮歌やら流行歌やらをがなっていると、うるさい、いま何時だと思うんだア、なんて怒鳴って、そうするとみんなが、バッキヤローって言ったろ？ あんなときはおれ、ああ痛快だ、とは思ったけれどね。でも、戦争批判なんてたまたま耳にすると、ぶったまげたな。なんたる非国民かと思ったな。

そういうところへ、ぼくみたいな単純なバカが入りこんだもんで……。でもまあ、ほんとに一年の、いや一ヵ月の相違で、人間の意識、批判精神ががらりと変えられた時代でもあったな。なぜかと言うと、他がみんな均一、統一されていたからね。中学生といったって、本も読めないし、旋盤工と同じだった。

辻 あのころは、高校に入っていた人と、中学生、それから小学生だったという人とは、相当に違う反応だよ。だいたい十七ぐらいから下の子は、やはり尽忠報国だったと思う。それは、当然だったと思う。

北 真相は知らされないし、理解能力もないしね。